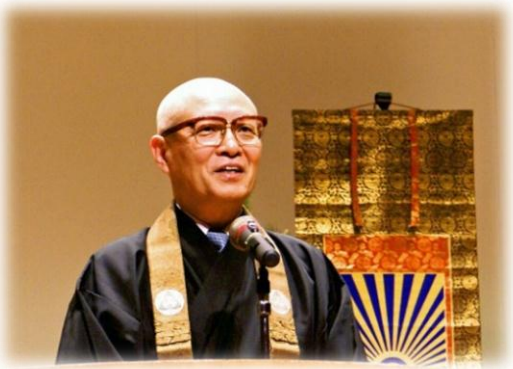
一心寺かわら版

第十四号　平成二十年九月発行

先日、アフガニスタンでペシャワール会の伊藤さんが殺害されるという悲しい事件が起こりました。以前ペシャワール会の福元さんとお会いし、そのすばらしい活動に賛同していただけに残念です。なぜ伊藤さんが犠牲になったのか、同じ日本人である私に責任はないのか、また犠牲者を出さないために何ができるのか考えさせられます。合掌

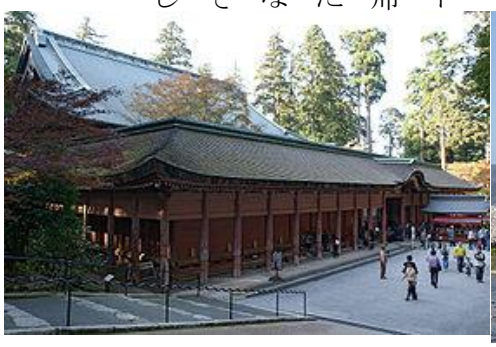
浅田正博師講演「自力から他力へ～私の歩んだ仏の道～」



去る五月二十一日、浅田先生の仏教講演会が開催されました。先生には龍谷大学で講義を受け、また卒業論文の副指導をしていただいたご縁があります。以前と変わらない力強い声と姿を久しぶりに見聞しました。今号は、先生の紙上講演です。

私（浅田先生）は医者の二男として生まれ、五歳で親戚の寺院に養子に入ります。中学二年までは仏教に興味がなかったのですが、心臓病にかかって実家に帰り生死をさまよう療養生活を送る中で始めて関心を持ちます。しかし、「仏の存在」や「極楽の存在」を否定も肯定もできないという悶々としたものでした。それがきっかけとなって後に龍谷大学で仏教を学ぶこととなります。ところが大学に入学すると驚くほど体調がよくなり、「仏の存在を問う」ことを忘れます。しばらくして反省し仏教を求めますが、重病を克服したという過信から、浄土真宗の寺に育った身でありながら、自分の道を自ら切り開き悟りに到達するという「自力」の教えに身を投じます。

大学では親鸞聖人が若いころ比叡山で修業されていたこともあり、比叡山を中心とする天台学を学びます。また、四国八十八ヶ所巡りもしました。そして次第に「禅」に興味が向かうようになり、坐禅を試みます。最初は痛くて眠くてたまらなかった座禅、毎朝、時には何時間何日も続けて行います。熟練してきた参禅七年目のある日、眼前に自分の心の中が現れ、その汚さがイヤというほど見せつけられました。我に帰った後、親鸞聖人の「悪性さらにやめがたし　こころは蛇蠍（じゃかつ）のごとくなり　修善も雑毒なるゆゑに　虚仮の行とぞなづけたる」という和讃が思い出されました。



いかに座禅しても、煩悩を抑え込もうとしても叶うものではないことに納得し、自力行の限界を知らされます。

七年間座禅をした果てにやっと気づいたのが自己の愚かさ、自力の世界にあこがれながらも思いが遂げられず、虚しく感じられました。その時、学問の師匠、佐藤哲英（さとうてつえい）先生のお見舞いに行った際に、「私はもう少しでお浄土に寄せていただきます。」と聞かされます。その死を受け入れた姿に驚きながらも、お念仏には力がある、生死を超える道があると感じましら。佐藤先生は一週間後に亡くなられました。

もう一人恩師として土橋秀高（つちはししゅうこう）先生がいらっしゃいます。土橋先生は、ご子息が助教授になることになり、親子二人で大学教員となると自坊を守ることができないからと大学を辞められます。その三年後に奥さまを亡くされ、その一年後には自身の失火から本堂と庫裏を全焼します。本堂はご門徒の助力によって二年後再建されますが、その一年後、今度は大学勤めをされていたご子息が自殺してしまいます。理由もはっきり分かりません。それでも孫二人が大きくなって寺を継いでくれるまでは、と頑張られていたのですが、その一年後、お嫁さんが孫を連れてお寺を出て行かれます。

ある日、そのような悲しいことばかりが続いた土橋先生を慰めようと訪れますが声になりません。

そこで目に入ったのが、ご本尊の前にあった

「両親おくり　妻さきにゆき　子のいそぐ　あかねの雲は美しき哉」

という先生の書かれた色紙です。この歌に驚くとともに、この下の句はどのような心境から出たのだろうかと不思議に思わずにおれませんでした。私が土橋先生の立場だったら、思わず仏に助けてほしいという気持ち一心で仏に祈っただろう。他にも土橋先生は

「祈りたき心のおこる寒空に　よもすがら立ちたもう姿尊し」

「願かけて祈る心に先立ちて　よりそうみ親あるをおもわず」

と詠まれていました。土橋先生もやはり祈りたい気持ちを持たれていたと知りました。しかし先生は、心の苦しみを阿弥陀さまに訴えて私が「祈る」以前に、阿弥陀さまの方が先に私の心の苦しみを見抜いて、たえず私の傍らにおって下さることにどうして気づかなかったのであろうか、と阿弥陀さまが尊く感じられた、と詠まれてあったのです。

私なら「両親おくり　妻さきにゆき　子のいそぐ　娑婆の世界にひとりのこして」という愚痴の言葉以外思い浮かびません。ところが先生は、太陽が沈んだ後に雲があかね色に輝くことでもって、懐かしい家族のみんなが集っている、あの西方浄土の世界を懐かしまれているんじゃないか、と思えたものでした。

しかしこの解釈は大変に浅い理解でしかないことが後になって分かったのです。土橋先生は著作の中で「光雲無碍如虚空」（こううんむげにょこくう）の文を引用されていました。正信偈の「光

雲無碍如虚空　一切の有碍にさはりなし　光沢かぶらぬものぞなき　難思議を帰命せよ」の冒頭部分です。このご文は矛盾した内容に見えます。あらゆる障害物（一切の有碍）に障害（さはり）がないとはどういうことでしょうか。

悩みや障害の雲は次から次へと湧いてくる。その雲が阿弥陀如来のお慈悲に照らされれば光り輝く「光雲」になるのです。この「光雲」こそが「あかねの雲」だったのです。「ご両親、奥様が亡くなられたこと」も「お子様が自ら命を絶たれたこと」も先生にとっては大きな障害であって、大きな悩みだったのです。しかしその悩みの黒雲が、いったん阿弥陀如来のお慈悲に照らし出されますと「光雲」の「あかね雲」に変えていただくことができるのです。するとその雲は光り輝きますから障害物が障害物でなくなります。そうしますと何ものにも遮られることのない、自在の境地です。先生はその「黒雲」があったればこそ、阿弥陀如来のお慈悲に触れさせていただくことができたと理解されたのだと思います。

土橋先生のご往生の後に残された色紙には

「南無　悔恨不帰歳　憂悩不測年　悲喜倶慈恩」

とありました。「すべて御仏にお任せいたします。どんなに悔やんでも過ぎ去った年月はもう帰ってこない。どんなに悩んでもこれから先はどのようになるのか測り知れない。よくよく考えてみれば、人生における悲しい出来事も、嬉しい出来事もみなすべてが如来様のお慈悲の中での出来事だったということが分かりました。」と読ませていただきました。しかし、人生の苦しみや悲しみをお慈悲のお陰と味わうことはまずもってできません。それができる方は、本当に人生の苦しみを知って、それと真剣に立ち向かい、自分の人生を阿弥陀如来にお任せし切ることができた方でしょう。

その土橋先生が往生された半年後、学生時代の友人三人と東京で集まりお酒を飲みながら昔話に花を咲かせていました。次の朝、隣の部屋を訪ねると友人が一人いません。バスルームには鍵が掛かっています。発見した時にはすでに彼の体は硬直していたそうです。心臓マヒでした。

悲しみというよりも茫然自失だったそうです。「朝には紅顔ありて夕には白骨となれる身なり」という諸行無常の道理とは理解していたつもりでしたが、身近で起こるとは思っていなかった私のうろたえぶり。

常住が当然であろうとする私の願いの前に無常という現実が容赦なく襲いかかります。その現実を否応なく認めざるを得なかった時、涙が出てきたように思えるのです。すると今度は「自分も死ぬんだ」という「自己の死」が実感として迫ってきたのです。

今まで常に「死ぬのは他人だ」と思って、「気の毒だなあ」という感情を持つだけだったのですが、「自分が死ぬ」と考えると恐ろしくてたまりません。現実に私の住んでいるこの世の中が「諸行無

常の世界」であって、私の人生そのものが「苦」であると領納できた時、そこから真剣に「仏法を求めよう」という強い意志が湧いて来るのだと思います。私は彼に、私の実生活そのものが仏教の教えの中にあることを教えてもらったように思います。

宗教は人生の「つり革」だと思います。人生に大きな障害が立ちはだかった時、思わず「宗教」に救いを求めようとします。しかし、そのつり革が私を十分に支えることのできる真実の教えでなければ倒れてしまいます。誰にもつり革が必要な時が来るのです。先生は佐藤先生、土橋先生のお導きで「お念仏に出会っていた」ことが、わが身を引き受けていくことができる道を開いて下さったのです。もしお念仏に出会っていなかったら、その苦しみから私もおかしくなっていたかもしれません。

それからしばらくして実母が臨終を迎えました。その時、お母さんは「死が怖い」と漏らしました。「一緒にお念仏を称えよう」と言えば済むことだったのですが、どうしてもその言葉が口をついて出なかったのです。私は他力のお念仏を喜んでいるつもりが、結局、身に付いていなかったのでしょう、情けなくも悲しく感じたものです。

しかし、周りの導きによって、本当に少しずつですが「お念仏」に気付かせていただいているように思います。そして今私が歩んできた自力から他力への道を振り返ってみましても、すべて御仏の計らいの中にあったように思えます。

紙上ですので、直接の声を聞くのとは違って十分には伝わらないかもしれません。しかし、若い頃の先生と同じく、私たちも普段は仏教と縁遠い生活をしていますが、自身のいのちのはかなさを感じた時に、身近な人が亡くなった時に、私のいのちとは、浄土に生まれるとは、と仏教を求める心が湧き上がってくるのでしょう。

本当に自らのいのち、すべてのいのちを大切にするならば、この私も、いのちの真実を説かれたといわれる仏さまの教えを聞かせていただかなければならない一人であると感じさせていただいたことです。